

寄せ場のストリートライフ ——釜ヶ崎における単身労働者の生活世界——

西田 心平*

都市において増加の兆しを見せている野宿者の問題を考えるうえで、寄せ場との関係を抜きにして語ることはできない。都市に散在している野宿者の多くはかつての日雇労働者であり、現在も寄せ場を何らかの意味で生活の拠点としながら生きている人々だからである。現在、社会学における寄せ場研究は、社会的な差別を告発する意図で、とりわけ市民社会と寄せ場との不連続性を強調する傾向にある。それによって「差別 - 被差別」の文脈で語られる寄せ場の世界は、一貫して階層上の断絶をともなった「被差別地域」として把握されてきた。都市下層における寄せ場研究において、こうした現状の分析的な見地にとどまらず、臨床現場における問題解決にどう対応していくかという点でのさらなる展開が求められていると筆者は考える。本稿ではこうした関心に基づき、釜ヶ崎での聞き取り調査によって得たナラティブ・データを通して、寄せ場を拠点として生きる人々の日常的なリアリティをたどっていきたい。

キーワード：寄せ場，釜ヶ崎，差別問題，戦略，アイデンティティ・ワーク，臨床の知

目次

問題意識と枠組み

釜ヶ崎のストリートライフ

1. フィールドの概要
2. 調査のプロセス
3. ストリートライフの諸相
 - 3-1 男らしさの流儀
 - 3-2 断片化した生活時間
 - 3-3 戦略とネットワーク
 - 3-4 野宿生活におけるアイデンティティ・ワーク

まとめにかえて - 臨床へのまなざし

問題意識と枠組み

日本の大都市には、手配師を介して日々肉体労働者の就労斡旋を行う青空労働市場として

「寄せ場」が存在する。東京では山谷、横浜では寿町、名古屋では笹島、大阪では釜ヶ崎がその主要な市場である。これらの中には就労の場としてだけでなく、日雇労働者の生活拠点として一定の広さの簡易宿泊所街を持つ地域も含まれる。釜ヶ崎はその一例であるが、労働者を包み込むその規模においては、これら4つの中でも最大の地域であるといわれる。そこでは様々な生活史を背負った単身の男たちが、固有のつながり、生き方のスタイル、無関心を共有しながら、それぞれの事情や仕事の選別に応じた移動生活あるいは失業状態での野宿生活を営んでいる。

現在の寄せ場ないしは日雇労働者をめぐる社会学的研究は、失業や貧困、社会的差別の問題構築を課題として、階層間の差別構造を批判・

* 立命館大学大学院社会学研究科博士後期課程

告発するという流れが主流である。その際寄せ場は、市民社会の権力性に対して「抵抗」していくための理論的な拠点として位置づけられ、そのため日雇労働者や野宿者の社会的世界は一貫して被差別地域という文脈のもとで語られてきた。

本稿では、社会学におけるこうした寄せ場研究の流れを踏まえながら、被差別地域とされる生活世界の中身をもう少し具体的に吟味してみたい。依拠する枠組みとはアメリカの社会学者 T・ライトの以下のような観点である¹⁾。

「超近代化（hypermodern）の時代を迎えた都市は、人種、ジェンダー、階級に基づいて階層化され、それによっていっそう分離された状況を生み出している。そこで権力から遠い周辺に置かれることは、伝染病のように避けられるべき他者であるといったイメージを帯びる」（Talmage Wright 1997: 77.）ことになる。とりわけ人種、ジェンダー、階級による不平等が最も露骨に体现されたホームレスの身体は、「墮落や軽犯罪、ないしは“ふさわしい場所”で矯正を受けるという惨めさと結びつけられていく」（*ibid.*, 78.）。そのようにして創り出された社会的想念が、「黒人の極貧層を公団住宅やシェルターに収容するか、存在を不可視なものとするために点在する住宅にばらまくか、といったいずれかの社会的実践を導くことになるのである」（*ibid.*, 79.）。

それに対してホームレスが抵抗するための実践が考えられないわけではない。だが、ライトはこういった状況を「抵抗」という論理で一元的にとらえることはしない。なぜなら都市空間の編成は社会的想念による意味作用の実践としてあるのであって、社会とホームレスという固定化した2分法ではなく、競い合う性質として

常にその関係は流動的（flux）なものだからである。主体と空間、そして環境との弁証法的な相互作用のもとで、市職員であろうがホームレスであろうが、その社会的アイデンティティは常に相対的でつかの間のもの（ephemeral）でしかない。

だからこそライトは、ホームレスという存在を「単に科学的対象として理解するのではなく、実際に生きている対象として理解することが必要である」（*ibid.*, 299）とする。社会批判を前提とした理論的な根拠としてではなく、彼らの「いま・ここ」における営みを重視する見方である。そのうえでフィールドであるシカゴの非営利組織の活動や、学生とホームレスとの「対話」をめざしたサービス・ラーニングなどの活動を検討しながら、そこで形成されたコミュニティそのものの自立をめざすコレクティブ・エンパワーメントの可能性を模索している。彼の冒頭での言葉が、すでにこうした枠組みの方向性を的確に言い表している。すなわち、「ホームレスの人々は、他のあらゆる人々と同様に都市や郊外、田舎の空間のなかで、自らの身体を規制しようとする欲望に抗しながら生存し、葛藤し、成長し、そして死んでゆく存在である」（*ibid.*, 39）と。

こうした議論から示唆を得て、筆者は寄せ場／ホームレス研究において従来の批判・告発型ではなく当事者援助やエンパワーメントをめぐる社会的実践を射程においたアプローチを検討していきたいと考える。本稿ではそのための最初の試みとして、釜ヶ崎を生活の拠点とする日雇労働者、あるいはそこを起点に周辺地域で野宿している人々の寄せ場のストリートライフを記述したい。具体的な作業としては、フィールド調査の中で筆者が得た質的データのストー

リー化を試みながら、単身男性労働者たちの
「生き抜く(survive)」ことにまつわる矛盾や
葛藤、そして制度との摩擦などを当事者のリア
リティに沿って浮かび上がらせたいと思う²⁾。

釜ヶ崎のストリートライフ

1. フィールドの概要

「釜ヶ崎」という地名は地図上にはどこにも
存在しない。「釜ヶ崎」というのはあくまでも
通称である³⁾。この街を知る日雇労働者は「カ
マ」や「ニシナリ」などの愛称で呼ぶ。主に西



釜ヶ崎地域の概略図 西成労働福祉センター製作

成区の萩之茶屋1丁目から3丁目ないし太子1丁目あたりを含んだ約0.62平方キロのごく小さな地域である。その外縁にはJR環状線と南海線それから地下鉄の御堂筋線が走り、東西を分けるように阪堺線が延びる。この周辺を生活拠点とする労働者の人口は、2万、3万、4万人と資料によって様々な数字が示されている⁴⁾。この地域では住民票を持たない人々が多く、これらの数字の目安は、あいりん労働公共職業安定所が発行する雇用保険日雇労働被保険者手帳（白手帳）から推定されているにすぎない⁵⁾。またそこで暮らす日雇労働者も経済動向によって常に流動的な状態にあり、それがまた数字として実態を確定しにくい主要な要素でもある（白手帳から推定される所持者の平均年齢は現在54.1歳である）。

この意味で釜ヶ崎という地域は実体的に規定されることを拒むかのように、対象として語ろうとする矢先から、誰が釜ヶ崎の住人なのかということすら明確に規定することはできない。誰が何処のアパートや簡易宿泊所、路上などでどれだけの期間生活しているのか、正確には誰にも把握することはできないのである。しかし、それでもなお対象地域の概要を語ろうとするなら、状況の細部に宿る「釜ヶ崎的なもの」に注目することが、より地域の特性を俯瞰するの

には早道ではないかと思う。

寄せ場

例えば萩之茶屋1丁目には釜ヶ崎の寄せ場がある（写真1）。1970年に開設されたあいりん総合センターの1階部分である。ここで午前4時、5時ごろから手配師と労働者との間で直接の就労交渉が行われる。青空労働市場ともいわれる所以である。建物の中には職業安定所、労働福祉センター、社会医療センターなどがあり、その他労働者のための食堂やシャワー室、公衆トイレ、公衆電話が設置されている。労働福祉センターからは1978年より毎月「センターだより」という地域の日雇労働者に向けた新聞が発行されている。日雇労働者からの詩の投稿、家族からの連絡を伝える「たずね人」「およびだし」「結核検診」「被爆者健康診断」「将棋愛好者の集い」「日雇雇用保険に関する解説」「天気予報」「夏季福利厚生費の支給」「求人状況」などの情報が詳しく記載されている。

ストリート

萩之茶屋1丁目から2丁目へわたって伸びる大通りが釜ヶ崎の銀座通りと呼ばれる場所である。国道から銀座通りへ入ろうとする所に、日雇労働者たちに対して「おつとめ今日も一日ご苦労さん」と書かれた看板が立つ。その向かいには日雇労働者用のズボンや作業着、軍手など



写真1



写真2

を専門に販売している店が並ぶ。通りに入るとその両側には簡易宿泊所やアパート、大衆食堂（写真2）、ホルモン焼き屋、それから弁当屋や銭湯、コインランドリー、散髪屋、コインロッカー、酒店などが建ち並んでいる。簡易宿泊所は一般にドヤとも称され、一泊から宿泊は可能である。地域内に200軒ほどが密集している。近年の労働者に対する求人の減少に伴って簡易宿泊所の稼働率が急激に落ち、そのために一泊軒並み3000円代だったところも現在は値下げの傾向にある。さらに進んで小さな路地へ入ると、そこには露天商や居酒屋などがひしめいていて、労働者たちの日常生活の中に溶け込んでいる（写真3）。そして一方で繰り返しストリートを歩くことで感じるようになるのは、労働者たちに対する警察官の肌を突き刺すようなまなざしや、地域内に設置された監視カメラ（地域内に16台）の視線である。また炊き出しなどが行われる三角公園の周辺では堂々と暴力団の路上ばくちが行われている。労働者たちを取り巻く差別と暴力的な抑圧はここではあまりにも露骨で日常的な出来事である。



写真3

暮らし

「生活に必要なものはこの街の中でなんでも揃う」と或る労働者は言った。小さな商店に入ると様々な食料・食材が単身者向けに売られて

いる。たこやほたての刺身、数の子わさび、いか素麺、やりいか、たらこ、ソーセージなど、酒の肴に事欠くことはない。さらにキャベツは小さ目のサイズ（40円）か、もしくは半玉売り。大根、白菜、長いもなどもすべて半分か4分の1サイズからの販売である。バナナは4本から、そして卵は1個ずつに付き30円で売られる。インスタントコーヒーは50gから、紅茶のティーバックは10パックから、そして洗濯用の洗剤は1回分20gの5袋入りから、蚊取り線香は30巻ではなく10巻入り、その他軍手、ティッシュ、綿棒、つまようじ、石鹸などが個々に売られる。惣菜は煮物や揚げ物といった手作りの品がそれぞれパック売りされているが、その並びでも特に目立つのが平積みになされた白飯の多さである。その他犬や猫などのペットフード、芳香剤なども目につく。単身の日雇労働者たちが店のなかに入ってきては、その日その時に最低限必要なものを小銭を出しては買っていく姿がある。その他南海線の高架下にある露天商や萩之茶屋3丁目のあたりの通りを覗くと自転車（6800円から）や土木作業用の仕事着、私服、小説や雑誌、ビデオ、靴などが路上へ向けて放り出されるようにして売られる光景が際立っている（写真4）。



写真4

2. 調査のプロセス

調査の方法は対象者の特性に応じて常に手探りであったし、様々なインフォーマルな形式をとって行われてきた。筆者が行動してきた基本的なプロセスはおおよそ以下のようなものである。まず日雇労働者や野宿者との最初の出会いは、98年2月から三角公園での炊き出しボランティア（平日の週2回）に参加することを通して可能となった。そこでは炊き出しに使う材料の調達から調理、配食まで労働者たち自身のボランティアでまかなわれていた。そして参加者の中には支援団体のメンバーもいれば全くそういった組織とは関係なく、いつもは簡易宿泊所に住んで仕事を探していたり、生活保護を受給しながら暮らしていたり、野宿生活をしているという人たちもいた。筆者はそういった人たちによって構成される炊き出しの調理ボランティアに半年間にわたり毎回参加することで、顔を合わせる人々と少しずつ語り合う時間を重ねるようになったのである。

そしてそれ以降、個別に知り合うことができた人たちから個々の具体的な生活ぶりや生活感情について、釜ヶ崎の住まいや野宿している場所に通って継続的にインタビューを行っていった。主に本人の生活史からはじまり現在の仕事や家族との関係、釜ヶ崎での人間関係などについて、自由に語ってもらう形式をとった。インタビューの場は簡易宿泊所の一室であり、路上であり、ダンボールやアルミ缶の回収に付き添いながらであったりした。もちろん自らにまつわる過去の出来事をやすやすと他人に語る人はいない。筆者は対象者との関係がどんなものであろうと（相手が筆者を快く思っていようとなかろうと）、相手とのその距離をそれ以上操作することはせず、その関係性を一定に保つことを

最重要に考えることにした。できるだけ時期を区切って1人ひとりに焦点を当て、決まった時間帯に本人が生活している場所へ訪ねて最近の様子をうかがいながら話を聴き、それを繰り返しながら少しずつその関係性を継続していくという方法であった。それが筆者自身にとっても対象者との関係を大切にしていこうと無理のないやり方であったと思う⁶⁾。

ただしそれは一方で対象者の生活形態や特性によって一定の制約も伴うものであったということを書いておかなければならない。簡易宿泊所の一室で暮らしていても路上の生活であっても、98年からのインタビューの間で現在もなお同じ場所に居続けている対象者は実際のところほとんどいない。寄せ場での求人が減少し収入が途絶えれば簡易宿泊所での生活を続けることはできないし、それでなくとも季節に応じて住みやすさを求めて生活の場所を転々と変える野宿者も少なくないからである。たとえば対象者の1人は、筆者が出会った時期には難波元町のとあるビルのシャッター前を寝場所としていたが、夏になるとそれまで使用していた防寒用のダンボールや毛布を捨て、どんどん寝場所を変えてしまうのだった。彼はマンションのゴミ捨て場などに捨ててある粗大ゴミを回収し、まだ使える品物を釜ヶ崎にある露天商に売っては日銭を稼いでいたのだが、野宿仲間に自分の場所を知られるのが嫌であるということと、より良い「掘り出し物」を探すために他の地域にも領域を拡大し続けていたのである。いずれにしてもこういった事情で、筆者にとって彼の生活を継続的に追いかけることは容易なことではなかった。次回はどこで会うことができるかということなど、本人にも筆者にも全く分からないことであったし、何よりも次の「約束」をす

ることで未来の時間が拘束されることを、彼だけでなく他の対象者も常に望まなかったのである。

こうして対象者の生活の場所へ訪ねていっても常にインタビューを継続できたわけではなく、往々にしてそれは中断されざるを得なかった。それによって筆者は日雇労働に就きながら生活する人と野宿生活をする人合わせて5人の対象者と関わってきたが⁷⁾、インタビューができた時間は1時間という人もあれば合計10時間以上に及ぶ人もあり、それぞれアンバランスな結果となっている。そこで情報の不足分に関しては、日頃こうした釜ヶ崎の人々と関わっている日雇労働者組合の構成員やリーダー、福祉センターの職員、あるいはキリスト教のシスター、ケースワーカーなど（計10人）からの聞き取りによって補足・肉付けすることになった。

なお以下に提示されていくナラティブ・データは、文字通り筆者との関係の中で語ることが可能な人々の声によって構成されている。だが釜ヶ崎での生活者は必ずしもこうした人々だけではない。例えばアルコール依存の問題を抱えた人もあり（実際に筆者も出会ってきたが）、社会学的にも捉えていくべき課題ではあるが、本稿では登場していない。さらにナラティブ・データの提示にあたっては日雇労働者、野宿者のナラティブを中心とした。それ以外の日雇労働組合のメンバーやシスターらからの聞き取りは、彼らのナラティブを筆者自身が解釈する際にその内容に大きな影響を与えているであろうということを認めておく。例えば3-2「断片化した生活時間」は、労働者へのインタビューから得た内容をヒントに福祉センターの職員から解釈の言葉を与えてもらったものである。

最後にフィールドの特性に根づいたリサーチの方法は、現在も筆者にとって現在進行形の課題である。分析的な方法論にとどまらず援助実践の課題を引き出すことに寄与する調査方法をめぐっては次稿での課題としたい。

3. ストリートライフの諸相

3-1 男らしさの流儀

釜ヶ崎で暮らす人々の日常のなかに有意なコミュニティを見出すことができるといっても、そのあり方は独特である。この街における人間関係の諸相には、強烈な男らしさのアクションが無数に散らばっている。自らの肉体を通して“精を出して働ける”ということは、労働者にとっては「男らしさのハビット」を獲得することでもある。こうして表出する男らしい行動や言動は、労働者どうしや野宿者との横の関係やつながりといったものではなく、仕事に基づいた縦の関係を露出させる。

この街では、「働かざるもの食うべからず」という観念はとりわけ強い、と筆者自身考える時がある。肉体労働は自分の身体1つが重視される固有の労働世界である。だからこそ、仕事での手際のよさや能力が自分の存在価値としてそのまま跳ね返ってくる。「ある仕事をうまくこなし、そしてそれをささえる『力』を現前に確認していく労働は、彼らにアイデンティティを見いだし、それを要因ともなる（西澤1995：97）。それらが同時に、労働者どうしのこの街での「関係」を規定する。ここでは彼らのこうした「男らしさ」の意識や言動に規定された関係規範に注目してみたい⁸⁾。

労働現場におけるディスコミュニケーション

まずは、彼らの労働の「現場」に場面を移して観察してみよう。例えば51歳になる倉本さんは、現金仕事が大半であるが、内容としては「一般土工」が多いという。自分の仕事ぶりについて、彼は自信満々にこう語る。

土方仕事いうやつ。土方仕事いうのは、体力は使うけど、気は楽ですからね。運転手とか足場の職人とかね、そんな仕事するよりは。...頭つかわんでいいんですよ。自分で、ほら、言われた通りにしとったらいいでしょ。まして、わしみみたいな性格やったら、人に使われるのは、もうごっつ嫌いやからね。自分で、いけいけの方やったですしね。

彼にとって「土方仕事」など手慣れたものである。人に言われなくとも自らの判断でこなしていけるし、そんな自分に満足している。だが、一方でこんなに「気の楽な仕事」でも、「要領の悪いヤツ」はいる。だからといって、彼はその相手に仕事のやり方などについていちいち説明してやるようなことはしない。現場での互いのコミュニケーションということには、彼自身全く関心がない。

...誰かに指示したりとか、わしそういうのは一番苦手やから。それするんやったら、自分でするぐらいやからね。わしは、人にあせいこうせい言うのが嫌いやからね。...それでまた分からんのもあるしね、分からんのに説明してもしようがないしね。だったらね、おっちゃんわるいけど一服しとってや言うて、その間にやってしまおうたらね、ええでしょ。

「誰かに指示したりとか、そういうのは一番苦手だ」という。仕事の分からない人間にいちいち説明するぐらいなら、自分でやってしまっ

たほうがよほど楽でいい。彼は「土方仕事」をするようになって、実に10年以上のキャリアを持つ。釜ヶ崎での生活は20年近い。勝手に自分で仕事をこなし、生活していけるだけの自信がある。そうすると労働者どうして仕事を教え合うということにはならない。

他方、日雇労働に関してここまでのキャリアを積んでくると、現場では決まった仕事を任せられることがあるという。

ただ、たまにやけどね、現場まかせるからちょっとやってくれや言うて、人間でも25人くらい、しょうがないから運転でもして連れていきますやる。そしたらどうしてもその日に仕上げなあかんような仕事ありますやる、そういうのが一番いやです。だから最近ではもう、運転手もせえへんようになっただね。運転手やったら、どうしてもね仕事なんか任せられることありますねん。だから、現場へいく車の運転やから、それならお前！謀臣（ぼうしん）や、いうことになりますねん。謀臣いうたら、まあ現場の班長みたいなもんですわな。わしはそれが一番嫌いやからね。人にあせいこうせい言うのが一番嫌いなんですわ。昔から、そういう体質やからね。何て言うかね、生まれてきた環境もあるんやろうけどね、それで生きてきたようなもんですからね。

現場の監督から仕事を任せられるということ、それだけの責任がのしかかるということでもある。その仕事が運転手という場合、謀臣の役回りをさせられるということの意味する。つまり「班長」として現場の責任を負わされるということだ。「わしはそれが一番嫌いやからね」と彼は苦い表情をする。なぜなら「人にあせいこうせい」と指示したり仕事を教えたりしなければならぬからである。彼はとにかく他人に対して指示したりされたりするのが強烈に苦手なのだという。相互に協力してその日の仕事

を完成させるよりも、出来ることだけ自分でやってしまう方が気楽でいいというわけだ。この辺り、実に「男っぱい」ドライな感覚である。これでは同じ釜ヶ崎から来た他の労働者ともなかなか横の繋がりは生まれにくいだろう。

男らしさの存在証明

横の繋がりが生まれにくいと言えば、その日に雇用されその日に解雇されるという日雇の現場においては、倉本さんのようなタイプ以外にも様々な人物が集まってくる。その日だけの知らない者どうしの集まりである。そうしたなかでの男どうしの人間関係は仕事の熟練度によって規定される側面が少なくない。今年で53歳になる石田さんは、釜ヶ崎で生活するようになってまだ日が浅い。去年の終わりまで会社勤めのホワイトカラーであった。彼にとって仕事現場で一番に苦しいことは、実にこの人間関係だという。

うーん...、しんどのいはね、人間関係。...そらまあ穴掘ったり、重たいもん持ったりしたら体はしんどい。だけど、そういうことより、もっと辛いのは、人間関係。例えば、いつも一緒にいるもん（と現場に）ぱっと行くんならええけど、あっちから来い、こっちから来いしてると、そういった寄せ集めで仕事行くでしょ。だから、何回か行ったら、顔なじみになることもあるけど、知らんもんどうしの集まりやんか。だからやっぱり、偏屈な人もいてる。そんで、おとなしい人もいてる。ほんま十人十色やから。でしゃばる人もいるし、一步下がってる人もおるから。そこの兼ね合いがうまくいかないわけ。だから、もう気はものすご使う。みんなそう言うてる。だから、それで辞めていく人もいてるし、途中で帰ってくる人もいてるし....。

石田さんの言うように、仕事の現場は常に知

らない者どうしの集まりである。まさに「十人十色の寄せ集め」だ。ただでさえコミュニケーションの苦手な男どうしなのに、毎回違う現場で違う人間と仕事をするのは、彼にとってみればそれだけで大変なストレスでもある。「そこの兼ね合いがうまくいかない」と彼は言う。なかには釜ヶ崎での生活が長い人になると、仕事上のことで口論にでもなれば一歩もあとへ引かない人も少なくないという。

...えらそうに言う人もいてるやん。...まあ、ぼくらは仕事知らないから、何言われても、はいはい言うてやるけど。ここで生活長くしてる人は、やっぱり、'何ぬかしてんねん、おれのほうが、よう知ってるわ'って思うてる人いてるから。だから、元請さんとか監督とかに、ちょっとえらそうに言われたら、口ごたえするとか、けんかするとか。もうそれせんかったら、ぱっと帰るとか、そういう無責任な行動と人多いわけ。だから、人間関係が一番難しいんちゃうかな。だから、あの人やったら行くわ、けど、この人やったら行かへん言う人けっこういてるよ。

現場で集まった人間どうしても相互にうまくコミュニケーションできないところが、「人に使われるのはごつつ嫌い」と言っていた倉本さんの雰囲気と同じだ。そんな男たちのなかで仕事をしないといけな石田さんは、周囲に対しては常に気を使う。

ここ（現場）はもう、ほんとに知らんもんどうしの集まりやから1日が。だから、こんなこと言うたら怒るんちゃうかなあ思うたら言えへんし。一緒に土掘ってても相手になんかの拍子でぱっと（土が）かかったりしたら、やっぱり、こんちきしょうって思うもんもいてるんやから。だからそういうのは、一番難しいね....。

彼らの現場でのこうした体験から、労働者どうしの人間関係がクリアーに見えてくる。先で述べたように、この街では自分の働きが露骨に生活の水準を規定する。職人層と一般労働者層では日当の額は格段に違うし、働けないアブレ層の人々は「アブレ手当」すら受け取る資格はない。それは逆に言えば、技能がない者、働かない者はそれなりの生活しか許されないということでもある。これは、アブレ層に対する「乞食」という呼称とか、「ああいうふうには、なりたくない」と語る倉本さんなどの感情にも表われている。労働者にとっては必ずしも「階層」として意識されているわけではないが、「土方仕事」といってもその就労は常に不安定なのだから、目の当たりにする野宿者たちに対して「自分はあれとは違う」という自己確認が必要なのである。

このことは逆に、一般層にとって仕事をするのが、自らの存在価値や誇りを見出す要因になっているということでもある。仕事ができる限りは自分の生活は賄えるし、「乞食」にもならなくて済むからだ。ましてや「土方仕事」の現場も経験がものをいう世界である。長年経験を積んでくるとあらゆるコツをつかむし、それなりの自信も生まれる。自分の肉体と経験でつかんだコツだけが頼りなのだ。倉本さんも「仕事では、いけいけの方」だと胸をはる。だから、同じ働くなら人に使われるのは面倒である。そうなってくると男どうしの現場は、それぞれがライバルのような人間関係になってくる。ただでさえコミュニケーションが不得意な男性たちが、現場で初めて出会う人間に意思を伝えたり仕事を教わったりといった疎通が成り立つはずもない。「ちょっとえらそうに言われたら、口ごたえする」人もいる。それが行き過ぎると、

喧嘩になったり仕事を投げ出したりする者も出てくるといった有様だ。

こうして眺めてみると、労働の現場は非常に「男らしい」世界である。このような世界でそれぞれが自らの存在価値を確認している以上、現場ではますます他人に対して一步も引けない。むしろ仕事の現場は、力関係を伴った、あるいは自らの力を誇示するような関係がより固定化されやすい世界であるといえる。

しかもこういった関係は、仕事を終えて釜ヶ崎に帰ってきても変わりはないようだ。石田さんはこう続ける。

...だけど、仕事おわって一緒に飲みに行くとか、カラオケ行くとか、そういうことはないね。だからもう、おわったらすぐに帰ってきて、自分の生活に入って行く人ばかりやから。そら、1人や2人は仲のいい人みんないてと思うわ。でもね、そういう人はね、何かあるとすごい喧嘩したりするんよね。

...自転車でばっと走ってて、何かの拍子にだれかと当たったとするやん。ほんたら、「こらっ何さらしてんねん！」と言う人いるやんか。あういうの聞いたら、なんであんなこと言うのかな、と思うよ。ちょっとさわっただけなのに。ぼくなんか、あっ、ごめんって先に言ってまうけど。だけど、そういうきつい言葉も平気で言えるようになってまうんよ、ここ（釜ヶ崎）におったら。

だから、ごめんという言葉あんまり言わないね、ここでは。すまん、とか、ごめん、とか言う人あんまりいてない。ありがとう、とか言う人もあんまりいない...

石田さんのこのような語りは、街の様子を实によく伝えている。仲が良いといっても、火がつけばものすごい喧嘩になる。「すまん」や「ごめん」という言葉もめったに聞かれない。

すれ違い様に体と体が当たったりでもすれば、すぐに怒鳴ってくる人がある。つい最近までホワイトカラーだった石田さんにしてみれば、「なんであんなこと言うのかな」と思うようなことばかりだという。そういうのがいやだから自分は無口でいることが多い、と石田さんは言っていたこともあった。

3 - 2 断片化した生活時間

西成労働福祉センター職員の寺田さんの仕事は、朝5時から始まる。福祉センター事務所の窓口を通して労働者に仕事を斡旋したり、相談業務にあたるのがその主な内容だ。彼はまさに、この窓口を挟んで釜ヶ崎で生きる男たちの暮らしや人間関係をかいま見る。

浮遊する現在

この街での日雇労働者の暮らしは、非常に孤独な人間関係を含んだものである。互いに名前も知らない者どうしで深い付き合いは抑制される場合も多い。その孤独を癒すために、多くの人にとって酒もまた必要とされる。しかし、労働者自身がこのような人間関係のあり方を語るわけではなく、彼らはそういう釜ヶ崎の街を生きただけなのである。つまり、彼らが語った「生き方」を筆者が編集し解釈したということなのだ。だから労働者は、なぜここでは「その場その場の嘘」が多いのか、あるいはなぜ「孤独」なのかといったことには答えられない。ある意味で、私とは違う視点からその“なぜ”に言葉を与えてくれるのが、職業的に釜ヶ崎とかわりながら労働者を観ている寺田さんの語りである。

...ほくもいろいろ労働者の人にアンケートとっ

たりすることあるけど、やっぱり友達はないね。‘いない’という返事の方が多いね。

彼は、釜ヶ崎ではなぜこのような「孤独」な人間関係なのかということについて、そもそも市民社会とは時間の感覚が違うのだということを使う。

...ここではね、時間の観念というのが若干違うのよ、時間についての考え方が。時間でいうのは、全部ね、ちぎれちぎれな時間で生きてるわけ、みんな。だから繋がってないんです。

「ちぎれちぎれな時間」とはどういうことなのか。彼は2つの側面から話をしてくれた。1つは、過去を断ち切った上で存在する「今」という時間である。

...たとえば、自分の人生っていうのは、普通は、もうすでにずっと線の流れで生きてると思うんだけど。ここではみんな、どこかで断ち切ってるわけ。小さいころとか、10年、20年前の違う社会で生きてきたときのことを思い起こそうとしても、気持ちよく思い起こす人はいないわけだね。なるべく忘れたい、断ち切りたいとかいう思いがあったり...。だから普通は、知り合っても断ち切っていくんよな。自分のことも語らないし相手のことも知ろうとは思わないし、関係も持続させようとは思わないしね。だって、なぜ釜ヶ崎へ来るかっていうたら、いろんな不運が続くなかで自分の生い立ちとか、夫婦生活とか、いろんな不運が続くなかで人間関係のつながりや、支えがあればね、‘釜’へ来なくてもよかったわけでしょ。もっと話を単純にしたら、仕事やめてリストラされて夫婦生活がうまくいかんことになってやね、家族の支えとか彼女の支えとか周りの支えとかあればね、特に釜ヶ崎に来ることはなかったんだからね。その時点で踏み止まって、なんとか新たに生活をして気持ちを立て直してやれるわけでしょ。それがいないから転々と放浪をはじめるわけだから。

例えば窓口の相談業務で、彼はある労働者のこんな生活史の断片に出会ったことがあるという。

…広島島の因島の日立造船に勤めてた人がね、当時すごい合理化があって指名解雇の対象になったんだって。そのとき、このことを奥さんに話したらね、「あなた日立の職員でなくなってしまうの、それなら私はこれ以上あなたと一緒にいるのはいやだわ」と言うわけよ。それで、なんていうか、奥さんが先に見切りつけて出て行ってしまったらしんだけどね。

それだって、もし奥さんがね、「日立やめたってあなたはあなたよ」という感じでね、程度の差こそあれ支えてくれたらね。少なくとも傍らにいてくれたらね。それなりにもっと頑張れたはずやんか。まあ、いきなりね、そんな言葉がやってくるはずがないわけで、もともとほんとの意味での繋がりが、愛があったわけじゃないんだと思うけどね。ただ、本当に奥さんにそう言われたって言ってたね、その人は。

だから、そういった過去を振り捨てて釜ヶ崎に流れてきた場合、寺田さんが相談を受けたこの労働者も含めた多くが人間不信の状態に陥っているケースが少なくないという。そんな状態の中で、この街において新たな人間関係を構築しようとは考えないのが普通であるというわけだ。

そして2つめの時間の観念の側面とは、日雇労働の雇用形態それ自体に由来するもので、明日へと結びつくことなく存在する「今」という時間の感覚だ。

…日雇ってという仕事の構造そのものが、その日その日の時間で生きてるわけだから。明日はどこへ仕事に行くかわからないし、雇用関係だって昨日と今日はまた違うし。だから、「釜」へきてからの時間だって1日1日での細切れで生きてるわけ

ですよ。で、1日の中でもいわばその場その場でうまく対応できれば、嘘つけばそれでいいわけだ。トゥモロー・イズ・アナザー・デイでやってるって言うかね。

だから逆に言えば、自分で計画立てられへんのよ。明日3時に会おうとどこどこで約束しても、翌日になって1時間くらいにたまたま手配師に声かけられたら、いい仕事があればそちらの方へ行くだろうし。夜勤の仕事がたまたま入れば、そっちに行くかもしれんし。あるいは、ばったり街のなかで誰かに会って酒をよばれて、そのまま気がついたら夕焼けだったとかいうこともあるだろうし…。

嘘と孤独

ある日雇労働者は、その場その場で嘘をつく人間がこの街には実に多いということを苦々しく語っていた。「約束しても一概に信用できない」、むしろ「騙されるほうが悪い」のだという。このように嘘やごまかしでその場を切り抜けようとする行動の背景にも、寺田さんの述べる「一日一日の細切れで生きる」という釜ヶ崎独自の時間の感覚が影響しているということがいえるのかもしれない。石田さんは日雇仕事で得たお金の使い方についてこのように私に話してくれたことがあった。

…ここに居るときは、仕事があるときは、毎日現金入ってきますやん。ほんたら、酒の好きな人とかばくちの好きな人やったら、そのお金をその日一日フルに利用できるやん。明日また働けば、またお金はいってくるやん。でも、月給やったらそういうわけにいかんやろ。もう使ってしまったら絶対ないねんやから、借りのしかないんやから。日銭やったら、低いよそら、だから使う金額は少ないけど、でも今日のお金使ってしまったら、明日働けばまた入ってくるんやから、そういう気持ちは大分あるよね。だから、今日はなくても明日はあるは、そういう考えで俺なんかやってるか

ら。それに慣れてもうたら、もう一番楽や思うわ。

彼は、その日に得た賃金を酒やばくちにそのまま全部つぎ込んでしまうという生活がかつて送っていた。「明日働けばまた入ってくるんやから、そういう気楽さは大分あるよね」と樂觀的である。これは、1日1日の細切れで生活を送るこの街独自の生活感覚をよく表わしている。

このように釜ヶ崎という空間において労働者は、過去とも未来とも繋がっていない「今」という時間の連続を生きている。西澤氏は寄せ場のこういった時間の感覚を、「むしろ『過去』から『未来』へと流れる時間からの離脱と言ったほうが近い」とした上で、「そこには『過去』にも『未来』にも束縛されない、ただ『今』を『自由』に生きることのできる別の時間が漂っている」と述べている（1995：119）。

だが、こうした寄せ場における時間の「自由さ」を護るためには、必然的にそこでの人間関係は抑制されたものになるであろうし、固定的・反復的な相互作用にしても持続されることはない。寺田さんもこれまで述べてきたことから、労働者間の「ネットワークの質」についてこのように述べる。

...だから、そうね、ネットワークという切り口で言うとうどう表現したらいいのかな。異質なもののほうがぶつかり合ってるという感じだね。普通のサラリーマンと違って、すごく移動性があるから、その意味ではいろんな人と出会っていく機会はあるわけよ。いつもすごいネットワークできるチャンスがあり、出会いが常に繰り返されてるのに、一方ではそれを断ち切り続けるというかな。出会い続けながら断ち切り続けてるんだよね。この要するに矛盾した関係が、これは常に継続してるわけですよ。

こうして釜ヶ崎では無数に繰り返される出会いを断ち切りながら、点として存在する「今」の時間を生きているがゆえに、個人としては常に「孤独」な状態におかれることになる。さらに寺田さんは、この釜ヶ崎における孤立化という側面は日本社会全体の傾向から考えても当然のことだという。

...80年代の後半にドヤが一斉に個室化したときに、というかビジネスホテル化したときに、よく出てきた言葉に「釜ヶ崎カウチポテト族」という言葉が言われたね。ちょうど、ほかほか弁当屋さんも進出してきたころだったしね。弁当買って酒買って、自分の部屋に帰ってテレビ見ながら食事をする、と。そういう言葉は、そのころよく使ったね。

だから、そのころから釜ヶ崎のネットワークというのは、質的に大きな新しい時代に入ったね。それ以前は、飲み屋で困んでみんなで飲んで、飯場の大部屋でみんなで寝てという感じで、良きにつけ悪しきにつけ濃いコミュニケーションというのかな、ネットワークがまだあったんですよ。それがより個々人へ分解していくのは、80年代後半からだね。

まあ、これは日本社会全体に言えることだから、この孤立化っていうのは。それが釜ヶ崎にも押し寄せてきたということだろうな。まあ、そういう世間の流れが、非常に釜ヶ崎的な分かりやすい形で現われてるだけともいえるよね。

「カウチポテト」とは80年代、日本社会全体で使われた言葉であった。釜ヶ崎でも同じ現象が、ドヤの個室化にともなって現われてきた。それと同時に、日本社会における孤立化の波もまた、より露骨な形で押し寄せてきたというわけである。

こうして寺田さんにとって釜ヶ崎とは、閉塞した時間の流れの中に存在し、かつ現在の日本社会の状態をより鮮明に表現したものとしてと

えられる。

3 - 3 戦略とネットワーク

春夏秋冬の野宿生活を生き抜くには、それなりの戦略や作戦を必要とする。それはフォーマルな賃金労働といったものではなく、都市の雑業的な仕事やそれでも賄いきれないところから派生する仲間どうしのつながりである⁹⁾。

「バタヤ」の誇り

太田さんは現在59歳。小柄で筋肉質な体つきをしている。地下足袋姿がこの人のお決まりのスタイルだ。50歳半ばを過ぎたころ、それまで定期的に就いていた土方の仕事を失った。50歳を超えると次第に仕事に就ける日数が減ってくる。仕事があるなら行くが、無ければ野宿しかない。

もう1人の室井さんは、丸刈りで赤いジャージのズボンが気に入っている。夏の暑いときは、上半身裸で都会をうろうろすることもある。現在67歳だそうだ。彼は50代の後半から角膜を悪くし同じように仕事に就けなくなった。この街で仕事を失うということは周囲の労働者からは「乞食」とか「ああいうふうにはなりたくない」という眼でみられることであり、他方で内面的には男性社会における唯一自らの存在価値を確認する手段を失うことでもある。他人への干渉を避けながら仕事に打ち込むことで以前は気楽に生活できていた釜ヶ崎も、一転就労の機会を失った者にとってはなんとも住みづらい街となる。

筆者 …仕事できなくなったら、西成はいづらですか？

室井さん …うん、いづらいね。それならもう、どっか探したら、寝るところあるだろうと思うて。そのままなっちゃったんです。

現在、彼は難波元町にある銀行のシャッターの前を自分の寝場所にしている。仕事ができなくなった以上、この街でいつまでも生活するつもりはない。釜ヶ崎には仕事があったから居ただけである。仕事を失えば、彼にとっては面倒な人間関係によるトラブルしか残されていないことになる。こうして彼らは、釜ヶ崎を出ていったのであった。

だが、そんな彼らも再び何らかの方法でお金を稼がなければ生きて行くことはできない。そこで彼らを選ぶ仕事は「バタヤ」である。バタヤとは一般に廃品回収業を指しているが、なかにはリヤカーでダンボールを集める者やアルミ缶を集める者と、様々に「専門分野」が分かれている。

室井さん …まあ、お金稼ぐって言ったって、アルミ缶集めてるよ。もう、たばこ代さえあったらええ思うとる。

筆者 …アルミを集めるのは、だいたい同じコースで？

室井さん …まあ、うん、自分のコースがある。こんなもん、ずうっとあっちこっち回れんわ。それで暑いときは、動かんもん。もう木陰のなかに入って横になってりして。朝とかね、涼しくなってから動いたりするね。朝は、たいがい5時くらいに起きるね。

…缶ビールのアルミあつめて、たばこをね、一番安いワカバを買ってるよ。ほんだらその場合アルミは600個くらい集めなならん。それもみなつぶしてね。たばこ1つ買うのに。ワカバは140円。もうほとんど毎日。よっぽど金が入ったとき

はマイルドセブンなんか吸いますけど。もう500円いうたら大金やもん、われわれにしたら。アルミもね、10キロなかったら500円ないから。だからわしは、目いっぱい集めて、300円になったらいいほうやもんね。だからもうタバコ錢だけ稼ぐんですわ…。

このインタビューの時期は真夏であった。室井さんの専門分野はアルミ缶である。彼の行動は朝5時からいから始まる。涼しい時間帯に回収に回り、暑いときは「木陰のなかにはいって横になったりして」過ごす。回るコースは自分で決めているので、収穫もほぼ一定している。140円のたばこのワカバが買える程度だ。そのために数日かけて600個のアルミ缶を回収する。それが彼にとってのワン・サイクルとなる。「目いっぱい集めても300円になればいいほうだ」という。「だからもうタバコ錢だけ稼ぐ」というつもりでやっている。

太田さんの方はアルミではなく、捨てられた電気製品や雑貨などを無作為に集めている。人によっては彼のような仕事をする者を「いろいろの扱い」と呼ぶこともあるらしい。例えば97年4月に初めて彼の寝場所を訪れたとき、いつも持ち歩いている台車の箱に入っていたものを「今日の収穫だ」と言って見せてくれたことがあった。その中身は次の通りである。

裏ビデオ6個、接着剤（低粘度速乾性）、眼鏡2個、サングラス、デジタルタイマー、ベル、ヘアーブラシ、夏物春物のズボン6本、洗面具セット、サラリーマンが使う鞆。

実に様々な廃品を拾ってくる。「いろいろの扱い」と呼ばれるゆえんだ。これを翌日の早朝に釜ヶ崎の中にある露店商に売って歩くのであ

る。三角公園の奥の通りに露店商が6～7軒並んでいる。その行きつけの店に入り、前日の「収穫」を携えて主人と交渉する。彼のいつもの男っぽい声色も、この時ばかりはねだるような笑顔の柔らかい口調になる。ヘアーブラシはケースから出さずにそのまま捨ててあったことを説明し、「商品」の「売り」を強調する。夏もののズボンもクリーニングを掛けたまま捨ててあったのだということを丁寧に解説する。店の主人はと言うと、あまりそれには耳を貸さず無表情でその商品を手で触りながら傷があるかないかを点検する。その度合から値打ちを判断し料金を彼に手渡す。チャリンと音をさせ、素早く彼は小錢をポケットに入れる。その店でさばき切れなかったものは、違う店に持って行き同じように交渉する。

彼によると、難波一帯に建ち並ぶ高級マンションなどのゴミ捨て場から廃品を拾ってきて釜ヶ崎の露店商に売る、という一連の作業を休みなく毎日繰り返しているという。売り上げとしては、1日1500円くらいが平均である。アルミ缶を集めている室井さんは「500円といったら自分には大金だ」と言っていたが、彼よりも若く、かなり広い範囲を歩いて様々なゴミ捨て場を探索することのできる太田さんは、それだけ稼ぎが大きいのである。

だが一方で、野宿生活の長い室井さんの方は道頓堀の焼き鳥屋やパン屋、コンビニエンス・ストアなどの残飯や売れ残りが出る時間帯を熟知していて、ほぼ毎日そこから「食事」を探してくる。こういうことに关してあまり得意でない太田さんの方は、しばしば彼からその食事を分けてもらうのである。だからそのお返しとして太田さんは、手にする売り上げの金額が多い分、室井さんに酒やたばこなどを奢ることにし

ている。こうして両者は必要な部分でギブ・アンド・テイクの関係にあるが、このことについては後で詳しく扱う。

彼らは、自らの「バタヤ」という仕事について語るとき実に饒舌になる。仕事のこつや方法について惜しげもなく、しかも楽しそうに話してくれる。実際、彼らはそれぞれの事情で日雇労働の道を閉ざされ釜ヶ崎での生活をあきらめた人々である。しかし、それでも彼らは直面することを余儀なくされた周辺的な状況に自分のやり方で適応し、生活の方法を見つけ出していく。そうやって生きている自身の存在を、インタビューのなかで強く表現してみせる。

太田さん ...まあ慣れっておそろしいもんでね。前はおれも一生懸命（日雇労働者として）働いたのにね、今はこんなバカやってんだよ（笑）。...でもこれも仕事なんだからね。あの、キリスト教のあれ（炊き出し）に並んでるのも大分あるんだから。おれの場合はそんなことせんでもこうやってね、やってんだからね....

室井さん ...結局みんなフーテンなんて軽く言うけど、やってみるとなかなか...。やっぱりこの道に入ってみな分かんよ。だれも好きでね...やれる人間なんておらんと思うわ。...にいさんみたいな学のある人にこんなこと聞いて笑われるかも分からんけど、人間で追い込まれるとやれるんと違いますかな。...土壇場まで追いこまれたら（笑）

本人には「炊き出しに並ばなくともこうしてやっている」という自負がある。「みんな軽く言うけど、やってみたらなかなか...」できるものではないのがフーテンである。「土壇場まで追いこまれて」こそこの「この道」なのであるから。

相互扶助のつながり

さらに彼らの横のつながりに注目してみよう。

普通ね、仲間意識ってあるんだよ、リヤカー部隊（ダンボール回収業）ならリヤカー部隊で集まって酒飲んだり話したりね...。こっちが金あるときはね、ワンカップでもチュウハイでもおごるけど。

「仲間意識」が大切なのである。室井さんと太田さんに限ったことではないという。リヤカー部隊の人々だって独自の仲間意識がある。「あつまって酒を飲んだり、話をしたり」。当然「金があるときは、ワンカップでもチュウハイでもおごる」のが普通である。

太田さんの場合、いろもの扱いとして稼ぐ一日の平均は1500円ぐらいである。ではその1500円を何に使うのかと聞くと、「たばことワンカップと仲間に少しぐらい奢れる余裕と」だそうである。筆者は驚いて、「では、食べ物はどうするのか」と尋ねると、「そんなもんは何とかなる」のだという。よく話を聞いてみると、彼の場合自分でコンビニエンス・ストアに期限切れの食品や残飯を探しに行くこともあるが、実際はやはり前項で述べたように室井さんが調達してきたものを分けてもらうことが多いようである。

...あのおっさんなんか、なんだかんだ食いもん屋を押さえてるから、昔からのね。前でもあのおっさん道頓堀りの焼き鳥屋とかパン屋とか押さえてたよ。で、いいやつだよ、さらのやつ。眼がみえなくても、長年バタヤだから分かるんだよ。またあのおっさんでないと店もくれんしね。そらーあのおっさんはアルミ集めてるだけだから収入ないんだから、食い物ね、探さないと。おれも昨日

でもパン3つくらいもらったよ、食パンとかね。焼き鳥屋でもね、あのおっさんがおさえてるから、おれも生活できる。

室井さんは、アルミ集めは「たばこ銭」を集めるためだけと言っていた。食べ物に関しては、「道頓堀りの焼き鳥屋とかパン屋とか押さえて」そこから調達する。彼の目に狂いはない。「いいやつだよ、さらのやつ」と太田さんは言う。「眼がみえなくても、なが年バタヤだから分かる」のである。また、「あのおっさんでないと店もくれない」という。長年のキャリアを重ねるうちに、室井さんとその店との関係ができていたのである。だからこそ太田さんも、「おれも生活できる」ということになるわけだ。「昨日でもパン3つくらいもらった」ばかりである。

こうして室井さんから食事を分けてもらったときは、自分のお金に余裕があると、太田さんはお返しにお酒やたばこを奢る。ましてや、そんなにお金がないときでも廃品の収集の際、野宿生活に使用するのに便利なもの、例えば台車や小さな鍋やマットなどが見つかったときには露店商へ売ることせず、室井さんのところへ持って行くのが通例となっている。

...だからこれ（生活道具）仕入れたらね、やりたりするわね。いやーあの台車とかね、みんなおれがやったやつ。あのおっさん眼がわるいからね、自分で探せんのよ。あの籠から全部ね。あのおっさん籠2台もってんだから。下にもう一つ1台はいいんだよ、おれのやったやつ。まあ、こんなすぐ見つかるからね。

「こんなすぐ見つかるからね」たいしたことじゃないんだよ、といった感じである。

室井さんは、このようなネットワークは自分たちが生きるために絶対に必要なものだと言っている。そもそも私たちが町中で野宿者を多く見かけるといっても、同業者たちにすれば狭い世界のようなのだ。直接コミュニケーションは無くても、誰がどういった所でどういう生活をしているのかというのは野宿者どうし互いによく見えているという。だから、よく町で見かける同業者がどうも体を壊したようだというのが分かったら、自分のその日の「収穫」を一部分けてやることも少なくない。例えば、太田さんは廃品を集めるためにマンションめぐりをしている際必ず見かける野宿者がいる。その野宿者は足が不自由なためいつも同じ場所にいてほとんどそこを動くことがない。

...もう歩けんから。だからもう昼はその公園に寝て、晩になったらその木のなかに寝てる。雨がふったら看板かぶってね。で、あそこはね、1人マンションのかあちゃんが、あのかあちゃんの野良猫に餌やってるよ。70歳ぐらい（の女性）。そのかあちゃんがよう（その足の悪い野宿者のことを）面倒みてるよ、食べ物やったりして。あういう人間にはおいらもね、同情で（食べ物などを）やっちゃうしね（笑）。別の人間もやったりしてるわね。

こうして彼らは、自分の視野が届く範囲で様々に助け合いながら自らの生存を図っている。野宿者たちの語りに耳を傾けていると、彼らのネットワークの方法と互いに生きるための一定の戦略がクリアーに見えてくる。

3 - 4 野宿生活におけるアイデンティティ・ワーク

日雇労働者であろうと野宿者であろうと、彼らの生活は必然的にあらゆるスティグマにさら

される。だが、彼らは自らの生活史を振り返りながら、現在の状況に対しても何らかの主体的な意味づけを行う。そして、それはとりわけ路上生活を送る者においては常に現在進行形のもののなのである。

ここでは1人の野宿者をとりあげ、彼によって語られた生活史、そしてその主体的な意味づけを重視しながら、＜過去＞＜現在＞＜未来＞とたどられるアイデンティティの構築過程をとらえていきたい¹⁰⁾。彼は語りのなかで自らの過去を断ち切るかのように、故郷の親類縁者とのつながりや関わりをいったん捨象してしまう。だが、それは現在を生きる自分を決してネガティブな存在へと押し込めてしまうものではない。彼は、これまでと現在の自分を受け入れた上で「これが宿命」だとして、これからの未来を「生きていけるとこまで生きていこう」と語る。こうした観点から、当然の権利として福祉サービスを受けることに対する彼なりの日常的な意識が述べられることになる。

過去の切断

野宿生活を送る室井さんは、現在67歳。生まれは青森県である。その当時の生活を彼はこう振り返る。

...終戦後の若いときは、警察に捕まえられたらブタ箱と違って、一夜でも飛び込むところあるでしょ、そこに何回、何十回入ったか分かりませんよ。昭和21年、22年、23年、この3年間、みんな食べるもんがなかったんですよ、にいさん分かります？

飲み物はなかった、酒なんかとんでもないよ。それから砂糖、米なんか特にないわね。だからもうね、担ぎ屋やったりね。結局、本州から北海道へ物の物々交換に行くわけ。それで向こうから、大豆とか小豆とか、あういうもの持ってくるんで

すよ。ほんでこっちから今度、米と長靴とかゴム長ね。それからお酒。氷枕あるでしょ、あの中に濁酒（どぶろく）をね、入れて、何十体で背中に背負ってね。そらあ途中で（警察の）狩り込みがありますよ。うん、トンネルのね、上り坂なんか待ち構えとるんですわ。早う言うたら、今で言うねずみとりみたいなもんですわ。列車なんか、夜に走っとるでしょ。そしたら警察が飛び込んでくるんですよ。もうそんなんなったら、いたちのかけっこや（笑）。みんなそうやとったんですよ。みんな食うために。それね、にいさん、そんなときはね、そんな子供以外だったらね、男だろうが、女だろうが関係ないよ。みんなもう、列車のなかで重ねて座とったよ。そのかわり仲はよかったですよ、お互い。知らんもん同士でも。ぜんぜん今の時代と違いますよ。今、人情味がないもん。そんなときはもうね、お互いしばい合ってね。

当時の「みんなが食べるもんがなかった」貧しい時代のことが語られる。北海道との「物々交換」に奔走したが、「男だろうが、女だろうが」みんなが「仲がよかった」という。

こうした戦後の若い時代の生活から、いつどのような人生の流れを経て彼が釜ヶ崎で生活するに至ったのかは分からない。しかし、彼にとって仲がよかった土地の人々や「人情味」のあったふるさとの地と、実際に別れ別れであった歳月がこれまであまりにも長過ぎたことは確かである。

...それは生まれたところは日本やから、国籍はちゃんとあるんやけども。だから結局身近な親戚は青森帰ったらありますよ。なんぼでもあるけども、この年になってね、60年間も何十年間もずっと離れておったら、もう他人と一緒にですよ。そうなっちゃいますよ、互いに。そうなるとやね、困ったからっていつてどうのこうのってわしの方から頼んで行くのは、それは虫がよすぎる。なんぼなんでもね、わしとしたらね。

「迷惑をかけずに生きていく」

「60年も何十年もずっと離れておったら、他人と一緒に」ある。そんな相手を今さら訪ねて行くのは、あまりにも我ながら「虫がよすぎる」。こうして彼は、過去に残した親類縁者とのつながりを意識のなかで捨て去ってしまう。そして、過去の人々に少なからぬ想いを残しながらも、それらを捨て去っても釜ヶ崎で生きて行かざるを得なかった自分の存在において、過去の断片をつなぎ合わせながら彼は語りを通して主体的な意味づけの作業を行なう。これまでの自分の人生をゆっくりと確認するかのよう。これが紛れもなく「いま・ここ」を生きる自分を規定する日常的な生活感情である。食べるものが無く、「物々交換」で賄っていた若い時代に再び触れたうえで、彼は路上で日々の生活をしのいでいる現在をこう語る。

...そんな時代でね、もう楽天家になっちゃったね。やる気があって、体が元気だったら、やれるもんやなと、そういうことが身に付きましたわ。それでもね、困ったからって自殺したりね、あれあかんよ。気が弱いんよ。これね、考え込んだってね、これ戻ってくるか来んか分からへんがね、にいさん。もうそういう考えですわ、わしは。だからね、人のことをどうのこうの言うなら自分でやれ言うの。そんなに人のいい面ばかり見てよかったです。

まあ、今でもこれは、アルミ缶集めるのも、これ仕事のうちやけど。まあ、体のためにはええけどね（笑）。でも金になろうと思ったらできないですよ。銭金考えたら。

そりゃ、今まではね、1日働いたら最低でも1万円の日当もらってたんやからね。飲むの好きなもんだから飲んだり好きなことできたけどね。それで、ようやってきたもんね（笑）。

だから、もう自分のやってきた道だからね、人を恨むこともないし、自分を恨んだら一番いいん

とちゃうか（笑）。そう思うよ。人を恨む必要ないんだから。わしはね、そう思う。

結局人間一緒だもん。どんな人だろうが、いろんな生き方あるけども。いろんな事情が重なって、金持ちになっても、地位が高くなっても、体が病気になるってガタガタになったとか、言う人よいうけおるでしょ。あんなのから考えたら、おれなんかほんま幸せ。自分のことだけ考えとったらええんやもん。そら、いいことないよ、こんなところ（路上）におったら。「おまえ、そんなところ好きであるんか」て言われたら、それでおしまいだよ。けども、行くところないもん、銭もないし。なかったら、ここで、迷惑かけんと生きて行けたらええと思っとるもん（笑）。

「人を恨む必要はない」という。「結局人間は一緒」で、それぞれに「いろんな事情」があるのだ。たとえどんなにお金持ちでも、病気などの人と比べたら「おれなんかほんま幸せ」だと言って頷く。もちろんこんな野宿生活で満足しているわけではないが、過去も故郷も捨てた自分にはもはや行くところなど何処にもないのだ。ならば、野宿をしながらでも「迷惑かけんと生きて行けたらええ」と考えている。

...自分は、もうここに9年くらいいてるけど、人に恨みかけるようなことはしないって、自分で胸に刻み込んでるから。それで、誰かが夜にここへきて、ブスっ！て（殺しに）やって来てもしゃあない。それでも、こんな年寄りやるもんなんかおらんて（笑）。なにも悪さしてない者やったって、自分の一銭の得にもならんことするアホな奴はおらんわ（笑）。そうでしょ。

だから、わしらはね、一匹やろ。何時襲われるか分らんやろ。それだけどね、何時だろうと、覚悟決めてるから。それもなにも、天の定めやと思って、わしは思っとるだけ。それだからね、飲んで暴れたってこともないわけ、ここで一度もね。そんな不埒なこともしてないしね。それだからって人を恨むこともないし。それがほんまのフーテ

ンやと思っとる。

...それに人をだましたり、人のもの盗んだり、そういう人間のほうが、まだ悪いと思うよ。人の弱みつけこんだりね、人を殺したりね。人間に生まれさせてもらっただけでもありがたいのに、まだ下等やわ、あんなのは。なんぼね、人道的な、心の魂もってなかったら...。まあ、そんな人ばかりじゃないんだろけどね...

なるほど、「自分を恨んだら一番いいんとかやうか」と言っていた彼にも、胸に刻み込んだ自分なりの価値観がある。今の社会には「人をだましたり、人のものを盗んだり」といった「下等」な人間がなんと多いことか。「人道的な、心の魂をもてない」人間が幅を利かせる社会である。彼は眼が悪いため新聞を読むことはできないが、拾ってきたラジオでよくニュースを聞く。このインタビューを行なったときも殺人事件や大手会社の不祥事が相次いで報道されていた時期で、彼は耳にそのラジオを当てて聞きながら、いつも顔をしかめている。たとえこんな生活をしていようと自分は「人に恨みをかけるようなことはしない」というのが、彼の言う「ほんまのフーテン」として常にある「心の魂」だ。現在の彼を支えるアイデンティティである。

さらに彼は語りの中で過去の断片をたぐり寄せつつ、現在の自分の生き方をもう一度ゆっくりと確認する。

...それにしても、困っとるからってね、人を殴ってあやめたりね、そんなことまでして生きてようとは思わんもん。今の時代は、ほんま楽やもん、その面だけは、食うだけのことやたらね。終戦の食べもののないときに生きとるもんやから。誰もなかったんやから。そここのところを生き抜いてきたから、なにも一人で生き抜いてきたわけではないけども。これも天のおかげか、なんのお陰かしらんけども...

「ほんまのフーテン」を自認する彼は、「人を殴ってあやめたり、そんなことまでして生きてようとは」思わない。「終戦の食べもののないときに生き」てきたのだから、それに比べれば「今の時代は、ほんま楽」なのだから。こうして彼は“いま・ここ”を生きる自分の存在において、自らの生活史とも重ね合わせながら様々な言葉で積極的な意味づけを行うのである。彼はいったん過去の人間関係すら意識のなかで切り捨ててしまうものの、それは必ずしも現在の自分をネガティブな存在へと押し込めてしまうものではない。そこには彼なりの確固とした価値観があり、なによりも堂々と生きてきた自分自身への自負があった。あるいは、生きるうえで「誰にも迷惑はかけていない」とは、彼自身を基本的なところで支えている日常的な生活感情なのかもしれない。

宿命と空白の未来

ではそのような感情あるいは日常的な考え方は、自らの「未来」へ向けてはどのように延びていくのか。そこにも、彼の日常の考え方としての一定の流儀を見て取ることができる。

...もう、はっきりいって、行き当たりばったりだね。もう宿命でもって決まってるわな。人間なんてわからんわ。いつ、どうね、病気になるか、何になるか分からへん。でもこれもいつまで生きれるか分からんし。こんなこと言うとしても明日死ぬかもしれんし。100歳まで生きるかもしれんし。それは、なんとも言われへん。もうね、こんな生活して、そんな長く生きんでもいいわって。生きられへんやろうと思うわ。でもわしは、逆らわんわ。明日死ぬか、明後日死ぬか、もう覚悟決めてるから（笑）。こんななのんの手柄にもならんけども。まあ、「あのおっさん、ずっとあそこにあるな」と言われるかもしれんけども（笑）。それで

ええんですよ。だれの迷惑もかけてないんやから。

これから先のことは「なんとも言われへん」というのが、彼の心底からの実感である。しかし彼は「覚悟を決めている」という。だから、どうなっても自分の運命には「逆らわない」。宿命の未来においても、彼は「だれにも迷惑をかけない」ように生きて行けさえすればそれでいいという。

そしてそんな彼が最も想いを込めて語るのが、最後の最後まで自分自身の力で生き抜いて行きたいということだ。

...まあ、性分が気楽なもんだで。もうこれは、実際ね、誰でも事情でもんが、あるからね。過去を振り返ったってしょうがないもんね。宿命になっとんかもわからんけども。それだからって、宿命だからって、落ち込んどったってしゃあない。生かされてる以上は行けるとこまで生きていこうかなと、これしか考えてない。そこで生き抜いていけるか、最後まで生きていけるか行けんかで決まるとちゃうか、その人の価値が。そりゃあね、えらいのはえらいよ、誰でも。それでも、だれでも生きるか死ぬか、二つに一つだけ。その環境にね、打ち勝つ強いものが、生き抜いていくとちゃうかね。だから、わしの場合は、終戦のあんな時代に生まれてきたんだなと。そりゃ、波乱万丈の人生だったと思う、おれ（笑）、ほんとに。そのかわり、でもいろいろ面白いこともあったしね。

このように語る彼に、筆者は以前、「70歳近い年齢に達して眼まで悪くしているのだから、こんな野宿生活などやめて福祉の助けを借りてはどうか。屋根のある生活に切りかえてはどうか」と問いかけてみたことがあった。すると彼はこのように答えた。

...うーん、あのー、なんかね、体いうのは不思議なもんでね。慣れてしまったらもうなんかなくなるいうかね。体が今元気だったら、あとはもうやれるとこまでやってみよう。だから、なんていうかね、病気になってみんとその（福祉に頼る）気にならんですわね。先のことはもうほんとに分らんからね。...だからもう、なるたけやったらもう世話んならんとこうと。それ以上にまだ、困るとる人間がようけおるんやから、そう思っとるから。まあ、それも人の考え方ひとつやけどね。

だから、気のもち方やわな。気が弱くなったら、もうあかんわ、こんなことできないわってなったらもう...へなへななってなって、そんなとこ行きたくなるとちゃうか、うん。

今は、弱い気がないから、だから弱い気がないちゅうことは、結局体が今、これでどっこも悪くないからこうなっとるんだと思うわ。どうしても体がよ、ガタがきたら、もうなんぼ偉そうなこと言っとってもあかんわ。どうしてもね、気が弱くなってしまう。そんなんと違いますか。そりゃあ人間そんなに変らんのか、自分も家があって帰れるとこがあったら、飛んで帰りたい気持ちもってるよ。家があっても行かない人もいてるけど、なかには。どういう事情で行かれんか、それは分からんけどもね。

まあ、おれの場合はもう、家はないわ、兄弟だっておらんわで、まあほんま天涯孤独みたいなもんだから、こんな状態だよ（笑）。だから気は強くもっておるわけよ。あれだよ、気が弱くなったら、もう一発で病気になるよ。だから気を強くもってないと。だからもうね、気の持ちようだと思いますよ。そうだと思いますわ、もちろん人によりますよ。そんなん、あんな人間なんて一番弱いから。弱い人間て。ほかの動物から考えても一番弱いよ。ただ気を強く持つとだけのことだよ。

彼は現在の路上生活という状況をいったん受け入れつつも、自らが「ほんまのフーテン」であると自認する。家があるなら「飛んで帰りたい気持ち」を持ちながらも、「天涯孤独」であると言い聞かせ「気を強く持って」生きていく

と語る。だが一方で、こうした意志がどこまでも彼が路上生活にとどまることを促していることも否定できない。当然の権利として福祉制度を利用できるにもかかわらず、自らそれを拒否していくのである。彼は現在もなおアルミ缶を回収しながら生活を続けている。

まとめにかえて—臨床へのまなざし

以上にわたって寄せ場に関わって生きる人々のナラティブを、ストーリー化しながら跡づける作業を行ってきた。ここで使用されてこなかったものも含めて、集積したナラティブ・データをどのように理論化しながら現場の実践につなげていくかは今後の大きな課題である。本稿は個々の労働者たちが語ってくれた内容やその中の感情の起伏を、筆者自身が反芻しながら汲みとっていくための重要な作業であった。その過程を経て彼らの語りの世界に共通して見出せるのは、言葉の一言一言に込められたある種の饒舌さと気概、そしてその表裏にあって自らも意識する根拠の無さと孤独の意識である。

単身の労働者が故郷やそこでの家族関係から乖離したところで営んでいる寄せ場の暮らしは、あたかも崖道を歩くように常に不安定で危うさを内に秘めている。アルコールで失敗し簡易宿泊所を出て行ってしまう人もあれば、高齢で体調を崩し路上での生活すら困難になって病院へ入った人もいる。またある人は住居にしていたアパートからも姿を消し、釜ヶ崎においてすらも姿を見かけなくなってしまった。実際、4年間にわたってインタビューを続けていくなかで、今も会って話を聞くことができるのは（対象者5名のうち）2名である。寄せ場や路上での仲間同士のつながりも、互いの創意工夫

によって助け合いの方法を発展させることは可能だが、仲間の一方が何かの事情で姿を現さなくなれば、それがあまりにも薄い絆であったことが露呈する。「迷惑をかけずに生きていく」という言葉は社会に対してだけでなく仲間に対して発せられたものでもあり、それは「ひとりで生きていくしかない」という孤独の道へといつても転化する可能性を内包している。

現在、寄せ場や野宿者をめぐる社会学的研究は、差別問題の構築を主題としながら多様な展開を遂げている。とりわけ近年の産業構造と寄せ場の日雇労働市場のダイナミックな変容を射程に入れた分析視角としては次の3つの視点があげられる。第1に、野宿者をめぐる階層上の析出過程と概念規定に関する認識論、ならびに都市下層で形成された社会的世界の意味領域に焦点をあてるもの（青木1989；2000 西澤1995；1997 中根1997a；b；c；d，1999など）。第2に、野宿者をめぐる「問題」構成の社会的なプロセスに焦点をあて、野宿者に関して発せられる言説がいかなる社会的コンテクストのもとにあるのかを明らかにしようとするもの（中根1995；1996 狩谷1997；1998；1999；2001）。第3に、さしあたり寄せ場以外の地域や路上において野宿者が営む日常的な相互作用に焦点をあて、そこでの生活戦略や集団形成のあり方、支援団体とのかかわりをとらえようとするもの（山口1998a；b 北川2001）、などである¹¹⁾。こうした取り組みの前提として共有されているのは、あくまでも野宿者の置かれた状況の側に立ちながら、彼らを「怠け者」としてとらえる社会意識や野宿に至る個人要因説に対して、批判の論拠を整備するという知的実践としての関心である¹²⁾。それだけではない。より広くは行政レベルでの「自立支援」や「対策」などの言

説から繰り出される対象のカテゴリー化や「社会復帰」の思想が、排除のイデオロギーと表裏の関係にあることを明らかにしつつ、そうしたイデオロギーを正当化する「社会」そのもののあり様を描き出すという社会学的課題へと向けられる。

これらのアプローチは、主として言説に対して新たな言説で対抗するという手法のもとに展開されてきた。だからこそ「解体地域」に対する「被差別地域」という主張が、パラダイムの転換にともなって大きな力を持ってきたのである。これは確かに「差別 - 被差別」の枠組みにおいて、「市民社会」と「寄せ場」を非対称的な関係として位置づける端的な二分法図式を用意し、それによって研究者が立つ側の位置をも明確に主張することを可能にした。しかし一方で、そこから「差別する側」との言説をめぐる闘争の水準に議論を尖鋭化すればするほど、現場の労働者が日々の具体的な生活で抱える矛盾や葛藤、苦しみといった「割り切れなさ」の位相からは一定の距離を生まざるを得ない¹³⁾。

筆者はその中に寄せ場研究に必要とされる今後の展開の可能性を見出したいと思う。すなわち青木秀男氏が寄せ場に関して主張する「固有の文化地域」「アジール（聖域）」「コミュニティ」という言説は、「解体地域」のスティグマを払拭し都市の多元性を強調する意図としては重要な意味を持つ。だが、「いま・ここ」にある寄せ場の日常を生きる労働者にとっての固有の文化、アジール、そしてコミュニティなるものとは、知的実践としても社会的実践としても、現実としてはこれから具体的に組み込まれるべき課題なのではないだろうか。つまり彼らの語られる世界に対して、あるいは「自分で生きていきたい」という意識に対して、いかにして具

体的な根拠と基盤を示しながらエンパワメントの方向を模索していけるか、ということに関わる問題として。筆者はこうした臨床の知と接続する研究のアプローチを模索することが、今後の寄せ場研究の課題であると考え¹⁴⁾。野宿生活の解消を掲げるのでもなく、ラディカルに社会の差別や権力性を問うことでもない。いかにして生きる根拠と選択肢を確保できるか、という問いのなかにそれらとは異なる次元で「社会」と深く関わる問題が含まれていると筆者は考えている。

注

- 1) われわれが生きる都市の日常とは、実に多様な意味のネットワークが錯綜する表象空間としてある。日々の生産・消費活動とは異なった次元で、様々な言説的、身体的実践を通して自らをとり巻く世界に意味を付与しながら生きている。そうしてわれわれは理解可能なものとして都市のリアリティを構成している。ライトはこうした観点から、カストリアディスの「社会的想念（social imaginary）」という概念を用いて「ホームレス」をめぐる言説がいかなる現実を構成しているかということに注目している（Talmage Wright1997）。
- 2) 被差別部落で生活する人々を長年にわたって調査してきた桜井厚氏は、ライフヒストリー・インタビューにおける調査者（インタビュアー）の実践について反省的にとらえ返している。すなわち、被差別部落の人々の「声」は「差別 - 被差別の文脈」に規定されながら、戦後の第一段階としては＜貧困、劣悪、悲惨＞、そして第二段階としてそれを乗り越えるために＜誇り、たくましさ、アイデンティティ＞というストーリーが調査者側のモデル・ストーリーとして用意されていたという。これらはその当時必要とされていた社会的実践の流れに大きく寄与してきた側面を持ちながらも、一方ではモデルにあてはまらないストーリーについては聞くに値しないものとして黙殺してきた経緯があることも

否定できない。桜井氏はこうした反省に立ち、「差別・被差別の文脈」から一人ひとりの生活の視点を重視する「主体の自律性」（「生活戦略」）へとモデルが変容してきた経緯を紹介している（桜井厚2000）。

- 3) 行政やメディアは主に「^{あいりん}愛隣地区」と呼ぶことが多い。これは1961（昭和36）年以降から山谷や釜ヶ崎で起こった日雇労働者たちによる「暴動」とされる出来事が発端であるとされる。この「暴動」をきっかけに寄せ場・釜ヶ崎が社会的に注目を集めるようになり、行政も何らかの手立てを打つ必要性が生じるようになる。そこでさしあたり地域のイメージ・アップを図るため、1966年大阪市・大阪府・大阪府警本部が連携する「釜ヶ崎対策連絡協議会」によってこの名称が与えられたという。なおこうした「暴動」を機に、釜ヶ崎がどのような問題として社会的に構成されていったかについての論考は、（中根光敏1996）を参照のこと。ちなみに「釜ヶ崎」という通称の由来については必ずしも明らかではない。ただ明治の時代から、現在と重なる地域に「釜ヶ崎」の地名は実在していたという。1922年より町名変更によってこの名称は地図上からは姿を消したが、以降もなお、ある種スラムの代名詞として「釜ヶ崎」は通称として残っているという。牛草英晴氏は、大正期の大阪市による細民調査でも現在の「愛隣地区」とほぼ重なる地域が「釜ヶ崎地区」として調査対象となっていたことをあげている（1993）。
- 4) 青木秀男氏は、西成警察署の資料から現役・元の日雇労働者の数として3万3200人のカウント（簡易宿泊所に宿泊している人1万7000人＋飯場にいる人5000人＋施設や病院に入っている人2900人＋「常習」の野宿者300人＋釜ヶ崎を起点として稼働する労働者8000人）を紹介している（2000）。
- 5) 1999年2月に出されたあいりん総合対策検討委員会が作成した「あいりん地域の中長期的なあり方」によると、平成9年3月末現在の手帳所持者の数は15,130人とされる。ちなみにそこから推測して地域内に滞在・居住している日雇労働者の総数は約20,000人弱ではないかとして

いる。年末やお盆の時期にはこの数は越えているとしながらも、ここでは飯場にいる人や施設・病院に入っている人、野宿生活を送る人々の数は厳密には含まれていない。

- 6) 基本的には対象者に了解を得た上で互いの中央にテープレコーダーを置いて話を聞いた。だが、この方法は他の支援者の人々からは賛否両論であった。現在はその場に応じてテープレコーダーとフィールド・ノートを使い分けている。
- 7) 具体的な対象者と現時点での生活、年齢をあげておく（ただしすべて仮名である）。倉本さん...日雇労働者。炊き出しをまかなう労働組合の事務所で生活、51歳。石田さん...日雇労働者。簡易宿泊所で生活、53歳。室田さん...毎日のアルミ缶回収でまかなう。難波で野宿生活、67歳。太田さん...毎日の廃品回収でまかなう。難波で野宿生活、59歳。吉村さん...生活保護受給。簡易宿泊所を出て釜ヶ崎で野宿生活、アルコール依存症、50歳
- 8) 自らも日雇労働者として釜ヶ崎で生活を送る水野阿修羅氏は、寄せ場・釜ヶ崎の生活世界を男性社会という視点から捉えることの必要性を主張する。水野氏は野宿者主流の年齢層の男性が「産めよ、増やせよ」政策の結果として異常な出生率のなかで生まれ、「立身出世」の教育を受けてきた特徴を共有していると述べる。つまり「弱音をはかない」「グチをいわない」「人に助けを求めない」といった規範が「男らしさ」として強く内面化された世代だという（2001：119）。
- 9) 新宿における野宿者どうしの「つながる戦略」「断ち切る戦略」などの諸相をめぐっては、（山口1998a）を参照。
- 10) この節の記述にあたって示唆を得たのは（山口1998b）の論文である。
- 11) 以上の整理以外にも重要な項目として次のような分類を付け加えておきたい。第4に、寄せ場の行政施策の変遷を歴史的に分析したもの（田巻1996；1999）。第5に寄せ場や野宿者への社会調査をめぐる権力性の問題を論じたもの（青木1996 中根1997a 文1997；1999）。
- 12) 西澤晃彦氏は野宿者の多様性を主張すること

の危険性について以下のように述べている。
「・・・個々の生きたリアリティへのまなざしの重要性を強く認めた上で、それとともに野宿者を層としていったんまとめ、その層がいかなる構造的メカニズムによって形成されたのかについて考えていくことも必要である。・・・構造的水準における、それゆえ鳥瞰的なこうした議論が欠かせないのは、野宿者をめぐる『自業自得』をいう新自由主義的な個人要因説が強力であり、その批判の論拠は常に整備されておくべきと考えるからである。・・・『野宿者にはいろいろな人がいる』という言説は誤りでは全くない。しかし、それが背後に潜む構造的要因への認識を解除する言説であるならば、個人要因説への反論の根拠を自ら放棄してしまうことにつながってしまう恐れがある」(2000: 28-29)。

- 13) 視点が確保されていないというのではない。青木氏は寄せ場労働者の被差別世界における集合心性を理解する手がかりとして<ミジメ>と<ホコリ>という2項対立図式を提起する。こうした枠組みによって主にこれまでは、寄せ場での「暴動」が分析対象とされてきた。差別や権力への異議申立ての機能を帯びた共同性の体現あるいは社会的結合を把握する視点である(平川1994 西澤1995)。青木氏によれば、この図式は寄せ場労働者に限られない人間精神を語る普遍的概念であるとしながらも、やはり過度に被差別性や周縁性を主張することに寄与してきた点是否定できないように思われる。
- 14) 野口裕二氏は、社会問題論における社会的現実に対置して臨床的現実という言葉提起する。主にナラティブ・セラピーという臨床領域での社会的構成主義の展開とかかわる用語である。具体的にはセラピストとクライアントが専門知に縛られることなく、双方の語り合いのなかで「問題」の意味づけや定義をめぐって「多元的な現実」を経験するその過程を指している。このように相対化された現実から新たな共同作業によってオルタナティブな現実が構成されていく。その際必要とされるのがセラピスト側の「当事者性」である(野口裕二2001)。寄せ場の問題に

置き換えて見たとき、臨床的な実践領域としてNPOによって取り組まれている当事者援助のフィールドをあげることができる。筆者の具体的な研究課題としては、この領域への社会学的な視点からの積極的関与、そしてそこでの方法論の構築にあると考えている。現在筆者は、寄せ場(釜ヶ崎)地域の再生、住み続けられるコミュニティ(sustainable community)づくりを基軸にしたNPOへの関与観察を試みている。

参考文献

- あいりん総合対策検討委員会, 1992, 「あいりん地域の中長期的なあり方」。
- 青木秀男, 1989, 『寄せ場労働者の生と死』明石書店。
- 青木秀男, 1996, 「都市下層と生活史法」『ライフヒストリーを学ぶ人のために』谷富夫編, 世界思想社, 125-148頁。
- 青木秀男, 1996, 「野宿者と現代都市—野宿者の形成と概念をめぐって—」『都市と都市化の社会学』岩波書店, 131-149頁。
- 青木秀男, 2000, 『現代日本の都市下層 寄せ場と野宿者と外国人労働者』明石書店。
- Berney G. Glaser and Anselm L. Strauss, "The Discovery of Grounded Theory: Strategies for Qualitative Research", Chicago: Aldine Publishing Company, 1967. 後藤隆・大出春江・水野節夫訳『データ対話型理論の発見 調査からいかに理論をうみだすか』新曜社, 1996年。
- 文貞実, 1997, 「『山谷』=社会空間の記述にむけて—一言説化される『山谷』, 身体化される『山谷』—」『現代日本社会に於ける都市下層社会に関する社会学的研究』文部省科学研究費報告書, 1-22頁。
- 文貞実, 1999, 「『寄せ場/野宿』への介入=『社会調査』について」『寄せ場』NO.12, 96-117頁。
- 平川茂, 1994, 「『暴動』から見た寄せ場の文化」『市政研究』第103号春季号, 32-39頁。
- 狩谷あゆみ, 1997, 「社会問題の構成と隠蔽—『道頓堀野宿者殺人事件』に関するマスコミ報道を事例として」『ソシオロジ』第42巻1号, 77-95頁。

- 狩谷あゆみ, 1998, 「法廷における犯行動機の構成と被害者のカテゴリー化—『道頓堀野宿者殺人事件』を事例として」『社会学評論』第49巻1号, 97-109頁。
- 狩谷あゆみ, 1999, 「保護／撤去／襲撃—震災後・神戸の野宿者問題」『場所をあける！ 寄せ場／ホームレスの社会学』青木秀男編著, 松籟社, 129-161頁。
- 狩谷あゆみ, 2001, 「カテゴリー化の暴力性—神戸市の野宿者問題をめぐって」『解放社会学研究』第15号, 75-97頁。
- 北川由紀彦, 2001, 「野宿者の集団形成と維持の過程—新宿駅周辺を事例として—」『解放社会学研究』第15号, 54-74頁。
- 水野阿修羅, 2001, 「野宿者急増を『男性問題』として考える」『寄せ場』NO.14, 112-121頁。
- 中根光敏, 1995, 「『寄せ場』差別の現象学—排除のカテゴリー化作用と市民社会のロジック」『エスノメソドロジーの現実』世界思想社, 167-184頁。
- 中根光敏, 1996, 「“第一次暴動”を基軸とした釜ヶ崎をめぐる社会問題の構成—行政対策を中心として—」『解放社会学研究』第10号, 163-184頁。
- 中根光敏, 1997a, 「社会学者は2度ベルを鳴らす—閉塞する社会空間／熔解する自己」松籟社。
- 中根光敏, 1997b, 「都市下層と寄せ場（1）」『部落解放ひろしま』第29号, 82-90頁。
- 中根光敏, 1997c, 「都市下層と寄せ場（2）」『部落解放ひろしま』第30号, 64-72頁。
- 中根光敏, 1997d, 「都市下層と寄せ場（3）」『部落解放ひろしま』第31号, 53-59頁。
- 中根光敏, 1999, 「アンダークラスとしての寄せ場—釜ヶ崎を中心として」『場所をあける！ 寄せ場／ホームレスの社会学』青木秀男編著, 松籟社, 199-223頁。
- 西田心平, 2001, 「『野宿者問題』の対象把握—『寄せ場』をめぐる先行研究からの検討」『立命館産業社会論集』第36巻第4号, 123-142頁。
- 西澤晃彦, 1995, 『隠蔽された外部 都市下層のエスノグラフィー』彩流社。
- 西澤晃彦, 1997, 「都市下層としての野宿者—『ホームレス問題』とその構造的背景についてのノート」『現代日本社会に於ける都市下層社会に関する社会学的研究』文部省科学研究費報告書, 79-90頁。
- 西澤晃彦, 2000, 「都市下層の可視性と変容」『寄せ場』NO.13, 27-37頁。
- 野口裕二, 2001, 「臨床的現実と社会的現実」『社会構築主義のスペクトラム パースペクティブの現在と可能性』ナカニシヤ出版, 58-75頁。
- 桜井厚, 2000, 「語りたいことと聞きたいこととの間で—ライフヒストリー・インタビューの管理をめぐる争い」『フィールドワークの経験』好井裕明・桜井厚編, せりか書房, 115-132頁。
- Talmage Wright., 1997, *Out of Place*, SUNY, NY.
- 田巻松雄, 1996, 「権力と都市下層—寄せ場笹島に関わる行政施策の変容—」『被差別世界の社会学』八木正編, 明石書店, 97-123頁。
- 田巻松雄, 1999, 「寄せ場と行政—笹島を主な事例として」『場所をあける！ 寄せ場／ホームレスの社会学』青木秀男編著, 松籟社, 227-253頁。
- 牛草英晴氏, 1993, 「釜ヶ崎—人と街—」『釜ヶ崎歴史と現在』釜ヶ崎資料センター, 三一書房, 113-163頁。
- 山口恵子, 1998a, 「新宿における野宿者の生きぬき戦略—野宿者間の社会関係をを中心に」『日本都市社会学会年報』第16号, 119-134頁。
- 山口恵子, 1998b, 「『こじき』と『こつじき』の間に—新宿における野宿者のアイデンティティ構築過程」『社会学論考』第19号, 1-19頁。

Yoseba Street Life: The Life-World of Day Laborers in Kamagasaki

Shinpei NISHIDA *

Abstract: The problem of “nojukusha” has been related to “yoseba” since the high-growth period of the Japanese economy. Because many “nojukusha” were once day laborers who gathered in “yoseba”, they use such areas for living and as bases for everyday life. Sociological studies of “yoseba” now tend to emphasize the gap between society and “yoseba” in order to criticize society and highlight this social discrimination. Therefore, “yoseba” has been analyzed as a discrimination problem. I believe that studies of “yoseba” should be conducted in the field in order to find solutions to the problem. This paper aims to realistically describe the everyday lives of “nojukusha” and day laborers on the basis of field research in Kamagasaki.

Keywords: yoseba, Kamagasaki, discrimination problem, strategy, identity work, clinical knowledge

* Graduate Student, Graduate School of Sociology, Ritsumeikan University